「なぎなた」徹底解説

2020年に鹿児島県で開催される、第75回国民体育大会「燃ゆる感動かごしま国体」まで500日余りとなりました。本市での開催競技は「なぎなた」。

5月25日、26日には、国体なぎなた競技のリハーサル大会となる「第60回都道府県対抗なぎなた大会」が枕崎市立総合体育館で開催されます。

今回の特集では、なぎなたの歴史やルールについて紹介し、また、なぎなたに関わる人たちへのインタビューをとおして、なぎなたの魅力に迫ります。

なぎなたの歴史

なぎなたの起源を探っていくと、歴史書「本朝世紀」の久安2年（1146年）の条に、源経光所持の兵杖（武器）を「俗に奈木奈多と号す」という説明が残っていることから、この頃からあったと推定されます。

そして、武器としての出現は永保3年～寛治元年（1083～1087年）の「奥州後三年記」、絵巻の絵詞に描かれているのが最初です。

曲線のある刃を長い柄に取り付け、太刀より応用自在に使えることから、多数の敵に相対したり、騎馬戦や海戦では有利な武器でした。しかし、16世紀の鉄砲伝来によって戦闘方法が変化し、次第に衰退していきました。江戸時代に入ると戦（いくさ）はなくなり、なぎなたは武家に嫁ぐための修養、武家の子女の護身用として用いられるようになります。

第2次世界大戦敗戦による武道禁止令により、一時、一切の武道は禁止されましたが、昭和30年（1955年）に全日本なぎなた連盟が発足し、戦闘武器ではなく、他人を思いやり、凛とした強い精神力を鍛え、平和な世界に貢献する「武道＝なぎなた」として再出発し、著しい発展を遂げ、現在に至っています。

近年では、公益財団法人全日本なぎなた連盟が中心となり、老若男女を問わず愛好者が増え、小・中学生、高校、大学、成人、そして世界大会まで、さまざまな競技会が開催されていて、日本の伝統武道「なぎなた」を世界中に発信しています。

なぎなた競技の基本

なぎなた競技では「試合競技」と「演技競技」の2つが行われます。

「試合競技」では防具を身に着け、定められた部位を互いに打突（定められた部位を目がけて打つこと）して勝負を競います。

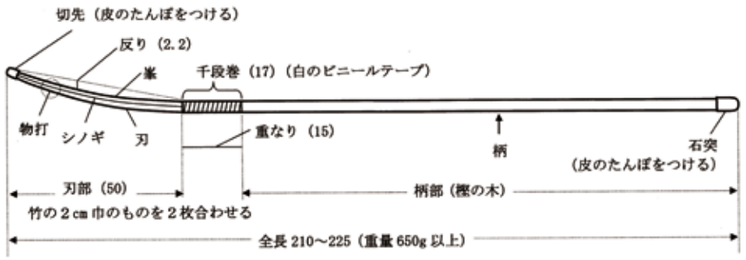
「演技競技」では防具を身に着けず、指定された形を対人で行ってその技を競います。

■試合場・演技場

コートの広さは、12メートル四方で、剣道よりも広いコートで行われます。

■用具

なぎなたは、左上図のような長さ、重量及び材質のものを使います。ただし、演技競技において「全日本なぎなたの形」が行われる場合は、樫（かし）の木で作られたなぎなたを使用します。



今回は「第60回都道府県対抗なぎなた大会」のルールに沿って、それぞれの競技について説明します。

試合競技について

試合競技は、5人の団体戦で行います。2人の試合者が定められた部位（面部、小手部、胴部、脛（すね）部、咽喉（いんこう）部）を確実に早く打突して勝負を競います。

技は、振りあげ、持ちかえ、振り返して左右からあらゆる方向へ打つことができます。敏速な動きの中から打突の機会を見出し、全力をあげて技を競い合います。

相手に対して、よい間合からタイミングよく技を出すことが勝利に結びつきます。

■試合の方法

3本勝負が原則で、試合時間内に有効打突を2本先取した方が勝ちとなります。ただし、所定の本数に達しない場合は、1本先取した方が勝ちとなります。

試合時間は3分で、試合時間内で勝負が決しない場合は、3人の審判員による判定となります。団体戦の勝負は、勝敗数により決定します。

■打突部位

打突部位は、左図のとおりで、「脛（すね）」があることがなぎなたの特徴です。

■有効打突

有効打突とは、なぎなたの打突部で打突部位を充実した気勢と適法な姿勢とをもって打突部位を「メン」、「ドウ」、「コテ」、「ツキ」、「スネ」と呼称しながら確実に打突することです。

次の条件を満たしている打突が有効と認められます。

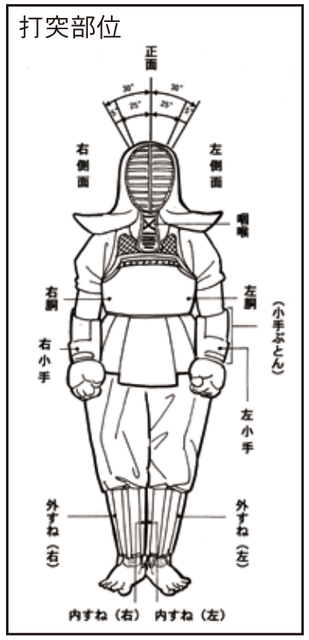
①物打（切先から15センチ位）が正確に打突部位に突立（つたて）つしていること。

②打突時に姿勢が正しく理にかなった動作であること。

③打突の機会が良いこと。

④気魄（きはく）に満ち、打った後に残心（緊張感を持続する心構え）があること。

⑤やや軽くとも追い込んだ際の打突、あるいは追い込まれた際に加えた最も確実な打突。



■勝負の判定

審判員は3人で、2人以上の審判員が打突を有効と認めた時、1本となります。審判は両手に赤白の審判旗を持ち、有効と認めた時はその方の旗を斜め上にあげ、有効と認めない時は両方の旗を前下で振って意志の表示をします。

審判員の判定に対して、異議の申し立てはできません。

■反則の主なもの

- 片足の全部が場外に出る。
- 倒れて体の一部が場外に出る。
- なぎなたの柄部で相手の側面を打つ。

このほか、試合規定に定められた反則を1試合中に2回重ねると、相手に1本が与えられます。

演技競技について

演技競技には、基本動作や技を組み合わせた「しかけ・応じ」と伝統的ななぎなたの技が洗練された形の「全日本なぎなたの形」があります。演技競技はこの「しかけ・応じ」、または「全日本なぎなたの形」の中から指定されたものを2人1組の演技者により行い、技の優劣を競い合う競技です。なぎなたの技の向上を図るとともに、正しいなぎなたの普及、発展を目的として行われる競技です。

※国体の場合は「しかけ・応じ」を、都道府県対抗なぎなた大会の場合は「全日本なぎなたの形」を行います。

■観点

判定基準となるのは、演技者双方の姿勢、服装、態度、発声、呼吸と気持ちが調和しているか、打突部位を正確に気魄に満ちた打突をしているか、残心、間合、手の内、着眼等理合にかなった技であるか、見る人に感動を与えたかなどの点です。

■勝敗

演技競技の審判方法は、5人の審判員が赤、白の審判旗を持ち、厳正的確に演技者の充実した気勢と適法な姿勢による技の良否を見定めて判定し、過半数をもって勝敗が決定します。

▲演技競技のようす